

なお石附教授の最後の論文となった「北海道考古学からみた蝦夷（エミシ）」古代文化 第三十八巻第二号を本誌に転載することに就いてこそよく御承諾下さった平安博物館館長角田文衛先生に御礼を申しあげます。

石附喜三男さんを悼む

吉崎 昌 一

あの賑やかだった石附さんが、突然に去ってしまった。私がカナダから日本に帰りついたその数時間前のことである。千歳空港から真直にお宅にかけつけると、「待っていたのだと思うよ……」と親族の方から嘆かれ、体から急に力が抜けてしまう。

彼が悪性腫瘍のように犯されていたことは、かなり早い段階に夫人より伺っていたが、こんなに早く去ってしまうとは考えられないことであった。昭和六〇年の五月には、考古学調査旅行で中華人民共和国黒竜江省に同行したが、その折には疲れがたまる、といいながらもいつもの様に元気で、接待にあたっている中国側のスタッフの間でも人気抜群であった。連日続く夜の招待宴では、すすめられる六〇度の白酒に音をあげる私をみて、スピーチと中国式の乾杯を引受けて助けてくれた。考えてみると、この時の酒が彼の寿命を蝕ばむきっかけになったのではないかと今も後悔している。

札幌医大に入院しておられた時に、担当のドクターから病状の改善についての暗い見通しを伺い、彼がベットの上で起あがれるうちに写真撮影しておきたいと思いたった。丁度カナダに旅行するために新しいカメラを一台入手したばかりであったから、これに超高度度のカメラフィルムをつめてでかけた。彼もカメラ好きである。メカを説明しながらテストということで互いに撮影しあったのである。同時に夫人の希望もあって、彼と夫人のにこやかにほほえんでおられるシーンも収めることができた。彼の最後の写真と彼の最後の撮影がこれである。彼が撮影した最後の写真―それは私が被写体であるが―それと彼の写真は、いつもいくつかの調査行の思い出とともに、私の研究室の机の引出しのなかにある。

このプリントを彼に進呈した時に、両方の写真を見較べながら「元気づいている、写りがたが違うな……」という。私の胸がうずいた。彼は重ねていった。「吉崎さん、もうこれからは好きな仕事だけしようよ。誰かが何とかいってかまやしない。回復したら、一緒に車をとばしてあちらこちらを見てあるこうよ。こまかいことは若い連中に任せてさ、すこし奔放に考古学をたのしみたくなつた」……と。

三〇年ちかい友人である。その気持が痛いほど分った。やりたい研究が雑務に追われて思うように進められなかった、と彼はいいたかったのである。「今年の秋になったら、また二人でどこか面白そうなお所にでかけるか。それに擦文文化についても議論しなくてはね」。私にはそれだけしかいえなかった。

カナダ旅行中に会った友人達は、私の話を聞いて「良い考古学者ほど早く世を去っていく。なんということだ！ 彼が悪性腫瘍のように犯されていくとは……」と嘆いていた。そしていくつもの御見舞いの言葉を託されたのだが、遂に生きている石附さんの耳にいれることができなかつたのは残念である。

彼が意識のある最後につぶやいた言葉は、「ちきしょう……！」であったように聞く。私には分る。これに引続いて彼がつぶやいた言葉が……。「もう少しで研究が完成するのに」であったに違いない。

擦文文化の研究を切り開いてきた北海道が生んだ俊英の考古学者が突然に世を去ってしまった。それは私達にとって、あまりにも大きい打撃であった。本当に、そしてあまりにも突然でありすぎた。研究の展望については何も語ることなく、石附さんは急にいつてしまった。後に残された仕事は、何とか皆で進めていくつもりです。石附さん、どうか安らかにお眠り下さい。

合掌
(札幌大学文化学科非常勤講師・北海道大学助教)

石附さんの思い出

木村英明

札幌で一番美しい春の訪れを待たずに、一九八六年三月二十七日、石附喜三男教授が急逝した。研究の良き先輩として、また大学の同僚として、私が考古学研究の道に足を踏み入れて以来二十六年間、常に前にいつづけた石附さんであった。

一九六〇年の四月、北海道大学理学部地質学鉱物学教室研究生の吉崎昌一さん(現在北海道大学文学部助教)を発掘担当者に、長沼町幌内堂林遺跡の第一次発掘調査が実施された。私が高校二年生に進級した

ばかりの時、水をたっぷり含み黒々した土、その土に今にも消え入りそうに残る雪の小さな塊、畑にころがるワサビなど、馬追丘陵にもようやく春の匂いがただよいはじめた頃である。札幌西高校郷土研究部の出身者を主体に組織された調査には、考古学専攻の道にすすんだ野村崇、斎藤傑、森田知忠、雪田孝、地質・鉱物学専攻の道にすすんだ緑川武の諸先輩や、考古学や地質学とは異なるそれぞれの道にすすんだ吉田茂、出村文理、有馬元明の諸先輩が集まり、手伝いとして三年生の藤森武夫、二年生の宇田川洋と私が参加した。そのうえ北海道の縄文時代の墓の権威・藤本英夫さん(当時静内高校教諭)や浦河郷土研究会の黒崎康夫さん、明治大学学生の桑原護さん、地元参加の高校生や有志の方々多数が特別参加し、珍しく賑わいをみせていた。この中にもうひとり、西高郷土研究部出身の顔があった。同志社大学の文化史学科で学ぶ石附喜三男さんである。これが、石附さんとの出会いであったと記憶している。

春とはいえ、朝晩の冷込みはまだまだ厳しい。しかも明りのない小屋での暮しに、早めに寝袋に体を沈める毎日であった。しかし、薪ストーブからもれる明りを頼りに、話しは夜遅くまで続いた。もっぱら懐かしい高校生時代の思い出話しやそれぞれが通う大学、研究室、そして考古学に話題が集中した。当然ながら、前の年に郷土研究部が発掘し、話題を巻きおこした栗沢町由良遺跡の竪穴住居址と土師器一式や、堂林遺跡に近い長沼町幌内の擦文時代遺跡の話しに及び、編年の問題がさかんに論じられていた。ここでの主役は、石附さんであった。口角あわを飛ばしながらの熱弁はなかなかの迫力があり、他を圧倒していた。本場の織内で土師器や須恵器に関する最新の研究に直接触れていた氏には、最も得意とするところであり、やがて終生の研究テーマになっていく課題でもあったからである。その場のほどよい緊張感と、情熱的な石附さんの姿は、今でも脳裏に焼きついている。この時